

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学校の中学年の頃、僕はがき大将で毎日近所のちびっこたちを引き連れて遊び回っていた。<sup>①</sup>縄張り意識が強く、僕は自分たちの町内をその統治下においていた、つもりだった。ほうかごになると、裏山に作った基地（斜面に生えた大木の枝に板切れや鉄材をくくりつけて作った掘っ建てだった。）に集まっては、攻めてくるかもしれない敵を想定して、僕は石投げの訓練を積んでいたのだ。

はじめてあの新聞配達少年を見たのは、その基地を建設しおわった直後の頃のことである。見張りに立っていた弟が大声で僕を呼んだのだ。

「兄貴、なんか変なのが走りよう。どがんする。」

僕は弟の指さすほうを見た。肩から新聞をぶら下げた少年（多分小学校の高学年か、中学の一年生ぐらいだと思っただ。）が、一軒一軒の家に新聞を放り込みながら走っているのである。新聞配達少年の存在は知っていたのだが、こうやって意識してまじまじと見るのは初めてのことであった。彼は僕らが見守る中、背筋を伸ばしてすつと下の道を通り過ぎてしまったのである。

翌日も彼は同じじこくにそこを通過していった。<sup>②</sup>肩から吊るしたたすきに新聞を山盛り入れて、彼は一軒一軒にそれを放り込んでいくのだ。僕はその姿に何か心を動かされていたのだが、沢山の子分たちの前で彼を褒めるわけにもいかず、つい心にもない行動をとってしまうのである。

そう、僕は彼目掛けて石を投げつけたのだ。

「皆、あいつは敵たい。敵のスパイに間違いないたい。」

小さな子供たちは僕の言うことを <sup>※1</sup> B 信じて、同じように彼目掛けて石を投げつけはじめたのだ。新聞少年は投石に気がつき、立ち止まると僕らのほうを一瞥した。しかし石を避けようとせすじつと僕らのほうを睨みつけるのだった。幾つかの石が彼の足にあたったが、彼は逃げようとはしなかった。

「やめ。」

それに気づいた僕はちびっこたちに石投げをやめさせた。子供たちは石を投げるのをやめ、僕の次の命令を待っていた。僕と新聞少年はそのとき初めて対峙して睨みあった。鋭い目をした強そうな男だった。僕たちが黙っているとまもなく彼は走りだすのである。

<sup>③</sup>それからときどき僕は彼を見つけては威嚇攻撃をした。そのたびに彼は立ち止まりじつと僕らを見すえるのだった。その目は鋭くかつて見たことのない動物的なものだった。

新聞配達という行為が悪いことではなく、<sup>④</sup> C りっぱなことであることはあの頃の僕でもちゃんと理解はしていたつもりであった。僕だけじゃなく、弟やちびっこたちもちゃんと知っていたはずだ。なのに僕が彼に石を投げたのは、多分彼の存在が気になっていたからなのだろう。新聞を少年が配達するということが一体どういことなのか、僕はすごく興味があったのだ。

それから少しして、僕らが社宅の門のところであつて遊んでいると、彼がとつぜん門の中へ走り込んできたのである。がちりとした身体をしていて、僕より五センチは背が高かった。僕は直ぐに彼と目が合い、睨み合ってしまった。そのとき、ちびっこの一人がいつもの調子で彼に向って石を投げつけてしまったのである。石はそれほどスピードはなかったのだが、少年の額にあたってしまった。そして少年はそのときはじめて僕らに抗議をしたのである。

「何で石ば投げるとや。俺がなんかしたとかね。」

<sup>⑤</sup>身構えるちびっこたちを僕は慌てて制した。そして少し考えてから聞き返した。

「なんばしよつとね。」

僕は新聞のつまったたすきを指さして聞いてみた。

「新聞配達にきまつとろうが。」

「そうやなか、なんで新聞ばくばりよつとか知りたかったい。」

僕は彼にぐいと睨みつけられて怯みそうだったが、ちびつこたちに示しがつかないのでじつと堪えていたのである。

「なんでって、お金んためにきまつとろうが。お金ば稼いで、家にいれるつたい。うちはお前らんとこみたい裕福やなけんな。」

「ゆうふく？」

弟が横から口を出してきた。

「ああ、うちは貧乏やけん、長男の俺が働いてお金ば稼がんとならんとよ。お前らみたいに遊んでるわけにはいかんつちゃ。」

彼のその言葉は僕の胸にびんびんと響いた。自分のことを貧乏といいきる彼がなぜか自分たちとは違う大人に見えたのだ。

「わるいけどな、これからは俺の配達のじゃまばせんといてくれんね。もし、邪魔するようだったら、こつちも生活がかかてるけんたまつちやおかんばい。」

彼はそう言うとき石を投げつけたちびつこを押しつけて新聞を配りはじめるのだった。

僕は何故かいいようのないショックで、それから数日考え込んでしまった。僕は昔から考え込むタイプだったよ。うだ。あのとき僕は新聞配達少年を実は心の何処かで X していたのだと思う。自分を彼に投影しはじめていたのだ。

それから数日して僕は社宅の門のところで彼を待ち伏せすることになる。子分たちは引き連れず、僕ひとりであった。そして夕方、いつもの時間に彼は新聞を抱えて走り込んできたのである。

「よう。」

彼は僕を見つけると、そう声をかけてきた。

「今日はそろそろいいのか。子分たちは。」

僕は大きく頷いた。

「今日はちよつとさしで話があるつたい。」

「なんね。」

新聞少年は眉間をぎゅつと引き締めて僕の顔をまじまじと覗き込んだ。僕は唾を呑み込んだ。

「実はあれから真剣にかんがえたつちやけど。俺も新聞配達やらしてくれんかとおもうてさ。」

新聞少年の顔がほころんだ。

「君がや。」

僕は真剣な顔つきで頷いた。

「だめやろか。」

新聞少年は首を振る。

「いいや、でもお前が考えているよりずっと大変なことたい。それでも途中で投げださんで続ける自信があるつちやうなら、話をつけてやつてもよかたい。ただな、いい加減な気持ちでやるとやつたら、俺がゆるさんけんね。」

僕は彼にはじめて微笑んだのである。

そしてその日の夕方、僕は彼に連れられて近くの新聞の集配所に行ったのである。初めての経験で僕はすっかり緊張していた。集配所は活気があって沢山の少年たちで溢れていた。みんなたくましく真っ直ぐの目をした連中ばかりであった。僕は彼に仕事の段取りを説明されながら暫くその場をかんさつしていたのである。それから僕は彼に紹介されたそのポストにお辞儀をした。ポストはえがおのたえない人で、一言、がんばるんだと言っただけだつ

た。しかし、その言葉はかつてどんな大人たちが僕にかけてくれた言葉よりずっと僕を大人として扱ってくれるものだった。そして僕は次の週頭から新聞を配ることになったのである。僕が自分で決めた初めてのアルバイトであった。

しかし、結論からいえば、僕は次の週頭から新聞を配ることはなかったのである。その晩、僕は食事の席で両親にその事を、やや自慢するように言っただが、突然父親に怒鳴られてしまうのだ。

「俺はお前にそんな苦勞をかけさせているのか。貧しい<sup>10</sup>思いをさせているのか。」

母は黙っていた。僕は褒められるだろうと思っていたので、父の怒鳴り声は予想外の出来事だったのだ。何時<sup>いつ</sup>だったか勤労少年のドキュメンタリーテレビをみながら父が目頭を濡らしていたのを僕は見て知っていたから、彼の<sup>9</sup>その行動はまったく理解することができなかったのである。そして余りの剣幕に僕は逆らうこともできなかった。

結局、僕の母が次の日新聞の集配所に出向き、僕の初めてのアルバイトは夢と消えることとなった。父は体面を気にしたんだ、と僕は後で考えた。新聞を背負わせて小さな子供を働かせていると、同じ社宅の人たちに何と思われるか分からなかったからだろう。

そして僕は次の日から新聞配達の少年をさけるように遊ぶことになるのである。<sup>11</sup>

（『そこに僕はいた』 辻 仁成）

語註 註1 対峙……二つの勢力が向き合ったまま動かないでいること。

註2 一瞥……ひと目ちらつと見ること。

|      |
|------|
| 受験番号 |
| 氏 名  |

一、~~~~~ 1～10のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(送りがなも書くこと。)

|     |      |      |    |      |
|-----|------|------|----|------|
| 5   | 4    | 3    | 2  | 1    |
| 額   | とつぜん | じこく  | 背筋 | ほうかご |
|     |      |      |    |      |
| 10  | 9    | 8    | 7  | 6    |
| 貧しい | えがお  | かんさつ | 配り | 身構える |
|     |      |      |    |      |

二、~~~~~ ①～③の意味を書きなさい。

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| ③   | ②   | ①   |
| 段取り | かつて | 制する |
|     |     |     |

三、~~~~~ A・Bを使って短文を作りなさい。

|    |      |
|----|------|
| B  | A    |
| 活気 | 想定する |
|    |      |

四、次の問いに答えなさい。

問 1 ―― ①「縄張り意識が強くて」とはどういう意味ですか、わかりやすく説明しなさい。

問 2 

|   |
|---|
| A |
|---|

|   |
|---|
| く |
|---|

|   |
|---|
| C |
|---|

 に入る語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① むしろ    ② まさか    ③ やはり    ④ すぐに

|   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| A |  | B |  |
|   |  | C |  |

問 3 ―― ②「つい心にもない行動をとってしまう」とありますが、本心で思っている行動とはどのようなものですか、説明しなさい。

問 4 ―― ③「それからもときどき僕は彼を見つけては威嚇攻撃をした」とありますが、なぜ攻撃を続けたのですか。

問 5 ―― ④「りっぱなことであること」と判断した理由を答えなさい。

問6 ——— ⑤「ちびつこたちに示しがつかない」とありますが、どうして示しがつかなかったのですか。

問7 ——— ⑥「自分たちとは違う大人に見えた」とありますが、どのような点が自分たちとは違うのか説明しなさい。

問8 

|   |
|---|
| X |
|---|

 に入る語句を、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① 感動      ② 邪魔      ③ 尊敬      ④ 軽蔑けいべつ



問9 ——— ⑦「俺も新聞配達やらしてくれんか」と思ったのはなぜですか。

- ① 新聞少年の姿にショックを受け、自分も彼のようにになりたいと思ったから  
② 毎日飽きもせずに行っている新聞配達はきつとおもしろいことだろうと思ったから  
③ 子分達に自分も新聞配達くらい簡単にできることを自慢したかったから  
④ 石を投げつけても逃げようともせずに新聞配達を続けている姿が気に入らなかつたから

問10 ——— ⑧ 「僕は次の週頭から新聞を配ることはなかったのである」とありますが、どうしてですか。

問11 ——— ⑨ 「彼のその行動はまったく理解することができなかった」とありますが、なぜ理解できなかったのですか。

問12 ——— ⑩ 「父は体面を気にしたんだ」とありますが、具体的にどのようなことを気にしたのですか。

問13 ——— ⑪ 「僕は次の日から新聞配達の少年をさけるように遊ぶことになったのはなぜですか。